

下関市立美術館 2022年度 特別展

2022年4月～2023年3月

## 山水画と風景画のあいだー真景図の近代

8月20日(土)～10月16日(日)

風景画は美術でもっとも人気のあるジャンルです。ただ、日本に山水画をもたらした中国の三千年の歴史をひも解くと、私たちが思い浮かべるような、きれいな風景画が描かれるようになったのは近代になってからであり、長らく山水画こそが美術の主流でした。

古来、日本において山は祈りの対象でした。そこには神聖なイメージが重ねられていたのです。それが江戸時代になると、街道が整備され、多くの人が旅を楽しむようになります。そして、各地の名所を描く「名所絵」も描かれ、さらに実景を描く「真景図」が生まれます。またこの頃から、西洋の客観的な自然の見方が入ってくるようになります。

本展では、江戸時代後期から昭和初期の日本人の自然を見る眼のうつり変わりをたどります。



司馬江漢《七里ヶ浜図》江戸時代後期、大和文華館蔵  
※展示は半期のみ



高橋由一《琴平山遠望図》明治14年(1881)、金刀比羅宮蔵

## ビアズリーの系譜

アールヌーヴォー、日本の近代画家たち

11月19日(土)～2023年1月29日(日)



オーブリー・ビアズリー『サロメ』より《ダンサーへの報酬》  
1894年、熊本県立美術館蔵※展示は半期のみ

19世紀末美術に特異な位置を占める画家、オーブリー・ビアズリー(1872-1898)。官能性と死のテーマが織りなす戯曲『サロメ』の挿絵は、彼の代表作として知られます。25歳で早世したにもかかわらず、その独創的なイメージは印刷物や出版物を通して伝えられ、同時代や後の芸術家たちに多大なインスピレーションを与えました。同時代のトゥールーズ・ロートレックやミュシャなどのポスターにも触れながら、『サロメ』の挿絵全17葉を中心に、ビアズリーと彼に連なる耽美的で退廃的な美術の魅力を紹介します。

西洋美術の受容期に、日本の美術家たちがビアズリーから受けたインパクトも見逃せません。藤島武二、橋口五葉、竹久夢二らの創作と、美術文芸雑誌『方寸』や『白樺』、『月映』に関わる画家たちの作品・資料から、日本の近代美術がビアズリーから受け継いだものに迫ります。



橋口五葉《此美人》1911年、  
鹿児島市立美術館蔵

# 令和3年度 新収蔵品紹介

令和4年2月24日に第61回美術資料収集審査会が開催され、寄贈64件、寄託3件、保管転換8件の計75件が新たに収蔵されました。作品の分類ごとの内訳は日本画1件、洋画24件、水彩・素描5件、工芸4件、写真28件、資料5件です。詳細は【表1】をご参照ください。なお、このたびの新収蔵品を含めた所蔵品数は【表2】のとおりとなります。(令和4年3月31日時点での見込み数)

このたびの新収蔵品は、そのほとんどが下関にゆかりのある作家、作品、コレクターによるという特徴があります。

日本画では、藤田隆治《牧娘》を受贈しました。【下図】藤田隆治(1907-1965)は下関市豊北町出身の日本画家で、1936年のベルリン・オリンピック芸術競技絵画の部で銅メダルを受賞した経歴を持ちます。当館では2007年に生誕100年を記念した特別展を開催したほか、所蔵品展で特集展示を実施するなど、下関ゆかりの作家として度々紹介しています。本作家の所蔵品は、昨年度保管転換をした12点を含め、31点となりました(うち寄託作品は12点)。洋画では、古館充臣の作品23点の寄贈を受けました。古館充臣(1926-2005)は下関市で活動した画家で、長らく長府の城下町や関門海峡の景観を題材に制作したことも知ら

れています。このほかに作家が数多く手掛けた書籍や新聞の挿画や画文集の原画の仕事に連なる資料もあわせ、長府のアトリエに遺された作品及び資料を一括して受贈しました。さらに、このたびは下関市内の施設等で保存・展示されていた洋画8点を保管転換しました。これらの作品の作者は現在でも下関市内を中心に活動している画家たちで、平成から令和の下関画壇を牽引している面々です。

また、近年の美術館での特集展示や企画展を契機として、クラフト作家富田一男の若い日の雑誌の挿絵原画や絵本作品等、そして吉岡一生、清水恒治、新谷照人といった地元写真家たちの写真及び関連資料も寄贈され、近現代の下関のアートシーンを語る作品が拡充されました。

工芸では、市内のコレクターによる19世紀後半から20世紀前半にヨーロッパでつくられたビーズバッグの一大コレクションの寄贈を受けました。リュネヴィルの作品やオール・デコの時期に作られた幾何学文様、またはビーズで風景画を描いたバッグなど多彩な様相が当時の華やかさを想起させます。当館には19世紀末ヨーロッパのポスター等のコレクションがあり、これらとの関連展示も今後期待されるところであります。このほか、赤間関硯の堀尾卓司、信夫父子の作品3点が寄託されました。

4月16日からの所蔵品展では、これら新収蔵品を紹介するほか、所蔵品を選びすぐって展示する予定です。

表2 下関市立美術館所蔵品数(令和4年3月31日見込み数)

分類	寄贈	寄託	購入	保管転換	計
日本画	184	62	148	25	419
洋画	199	36	151	28	414
水彩・素描	144	10	27	1	182
版画	216	3	553	0	772
彫塑	121	0	34	1	156
工芸	168	52	97	0	317
写真	46	0	6	0	52
書	3	0	0	0	3
資料	130	22	8	2	162
合計	1,211	185	1,024	57	2,477



藤田隆治《牧娘》

表1 令和3年度新収蔵品一覧

分類	作者名	作品名	制作年	材質	寸法	収集別
日本画	藤田 隆治	牧娘		紙本墨画着色	49.3 × 60.2	寄贈
洋画	綿谷 清志	K氏の時間 2	1981年	油彩・キャンバス	161.5 × 130.5	保転
洋画	綿谷 清志	Dannoura' 87	1987年	油彩・キャンバス	120.0 × 300.0	保転
洋画	金井 健一	鼓動(風景 NO.5)	1991年	油彩・板	各180.0 × 90.0	保転
洋画	泉 将志	旅人	1990年	水彩、インク・紙	103 × 145.6	保転
洋画	前川 謙一	流動するもの(V)	1986年	アクリルカラー・シルク	141.0 × 161.5	保転
洋画	石山 義秀	ペタンクをする人々	1984年	フレスコ・麻布	195.5 × 163.5	保転
洋画	村岡 真樹	パース オブ パース	1994年	アクリル・板	各182.0 × 92.0	保転
洋画	川野 裕一郎	魂の遊戯-93 NO. 2	1993年	油彩・キャンバス	91.0 × 116.7	寄贈
洋画	野見山 暁治	我にかえる	2008年	油彩・キャンバス	162.0 × 131.0	寄贈
洋画	古館 充臣	ホームへの階段	1966年	油彩・キャンバス	117.0 × 116.7	寄贈
洋画	古館 充臣	題不詳(海岸のボート)	1970年代	油彩・キャンバス	117.0 × 80.2	寄贈
洋画	古館 充臣	漁村の自画像	1972年	油彩・キャンバス	100.0 × 80.3	寄贈
洋画	古館 充臣	鹿船	1973年	油彩・キャンバス	116.5 × 89.9	寄贈
洋画	古館 充臣	暗い海	1973年	油彩・キャンバス	112.1 × 145.5	寄贈
洋画	古館 充臣	白い砂	1974年	油彩・キャンバス	112.1 × 145.5	寄贈
洋画	古館 充臣	漂着樹根	1975年	油彩・キャンバス	112.1 × 145.5	寄贈
洋画	古館 充臣	二隻の船	1976年	油彩・キャンバス	112.1 × 145.5	寄贈
洋画	古館 充臣	不安定な休息	1978年	油彩・キャンバス	100.0 × 80.3	寄贈
洋画	古館 充臣	鳥籠とマヌカン	1979年	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	帽子をかむったマヌカン	1979年	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	サーカス	1980年	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	<マリオネット>君の涙	1980年代	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	水色の時間	1980年代	油彩・キャンバス	117.0 × 117.0	寄贈
洋画	古館 充臣	ランプのある静物	1982年	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	アトリエのマヌカン	1984年	油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	アルファマの女	1988年	油彩・キャンバス	91.5 × 91.5	寄贈
洋画	古館 充臣	アトリエ	1998年	油彩・キャンバス	100.0 × 72.7	寄贈
洋画	古館 充臣	靴と昆虫	1999年	油彩・板	90.9 × 72.6	寄贈
洋画	古館 充臣	人物		油彩・キャンバス	162.1 × 130.3	寄贈
洋画	古館 充臣	題不詳(人形のある静物)		油彩・キャンバス	100.0 × 80.3	寄贈
洋画	古館 充臣	古い時計と人形		油彩・キャンバス	53.0 × 45.6	寄贈
洋画	古館 充臣	マンダリンのある、	1995年	油彩・キャンバス	99.7 × 80.5	寄贈
資料	古館 充臣	古館充臣資料				寄贈
水彩・素描	中西 利雄	(婦人像)		鉛筆・紙	34.4 × 23.4	寄贈
水彩・素描	椿 義則	(無題)	1974年	水彩・紙	25.7 × 22.6	寄贈
水彩・素描	椿 義則	(無題)		インク、アクリルカラー・紙	33.6 × 30.6	寄贈
水彩・素描	富田 一男	雑誌『いちごえほん』挿絵等原画	1978-1982年	水彩、インク、鉛筆・紙		寄贈
水彩・素描	富田 一男	初期絵本作品	1969-1981年頃	水彩、インク、鉛筆・紙		寄贈
資料	富田 一男	イラストレーション制作関係資料		水彩、インク、鉛筆・紙		寄贈
写真	清水 恒治	闘犬	1963年	ゼラチン・シルバークローム	24.2 × 29.2	寄贈
写真	清水 恒治	朝の唐戸電停	1965年	ゼラチン・シルバークローム	20.0 × 27.0	寄贈
資料	清水 恒治	平尾台取材資料	1986-87年	ゼラチン・シルバークローム		寄贈
写真	清水 恒治	地獄階段	1986年	カラープリント	117.5 × 84.0	寄贈
写真	清水 恒治	作為の気配	1986年	カラープリント	29.0 × 39.7	寄贈
写真	清水 恒治	鎮座して12年	1986年	カラープリント	29.0 × 39.7	寄贈
写真	清水 恒治	扇風機	1986年	カラープリント	39.8 × 29.0	寄贈
資料	清水 恒治	長崎・端島取材資料	1986-87年	カラープリント	各 12.5 × 17.5	寄贈
写真	清水 恒治	夕餉時	1965年	ゼラチン・シルバークローム	40.0 × 29.0	寄贈
写真	清水 恒治	ボタ山	1965年	ゼラチン・シルバークローム	40.0 × 29.0	寄贈
写真	清水 恒治	小炭釜	1965年	ゼラチン・シルバークローム	40.0 × 29.0	寄贈
写真	清水 恒治	視線	1964年	ゼラチン・シルバークローム	29.0 × 40.0	寄贈
写真	清水 恒治	掌	1964年	ゼラチン・シルバークローム	40.0 × 29.0	寄贈
写真	清水 恒治	山をなすエンジン	1985年	ゼラチン・シルバークローム	29.0 × 39.8	寄贈
写真	清水 恒治	Jazz Festival' 85(熱狂の時代)	1985年	ゼラチン・シルバークローム	40.0 × 29.0	寄贈
写真	吉岡 一生	一会一語	1996年頃	ゼラチン・シルバークローム		寄贈
写真	吉岡 一生	私もいっしょに	1953年頃	ゼラチン・シルバークローム	29.8 × 20.5	寄贈
写真	吉岡 一生	阿蘇中岳	1957年頃	ゼラチン・シルバークローム	27.5 × 20.2	寄贈
写真	吉岡 一生	天草時代祭	1957年頃	ゼラチン・シルバークローム	28.8 × 23.1	寄贈
写真	吉岡 一生	京都龍安寺	1957年頃	ゼラチン・シルバークローム	30.1 × 21.7	寄贈
写真	吉岡 一生	華道もツイストで	1962年頃	ゼラチン・シルバークローム	30.0 × 22.2	寄贈
写真	吉岡 一生	愉快な仲間 馬関まつり	1950年代	ゼラチン・シルバークローム	23.9 × 29.8	寄贈
写真	吉岡 一生	ダンスパーティー ホテル水産会館にて	1955年頃	ゼラチン・シルバークローム	23.4 × 30.0	寄贈
写真	吉岡 一生	ドームの秋	1961年頃	ゼラチン・シルバークローム	31.6 × 92.4	寄贈
写真	吉岡 一生	祈り 広島平和公園にて	1961年頃	ゼラチン・シルバークローム	32.0 × 92.7	寄贈
資料	吉岡 一生	吉岡一生撮影資料				寄贈
写真	新谷 照人	野球	1950年代	ゼラチン・シルバークローム	23.3 × 28.8	寄贈
写真	新谷 照人	山下清	1950年代	ゼラチン・シルバークローム	20.2 × 28.8	寄贈
写真	新谷 照人	中原ミサオ	1953-54年頃	ゼラチン・シルバークローム	24.1 × 30.1	寄贈
写真	新谷 照人	福岡県無形文化財 福島灯籠人形	19563年	ゼラチン・シルバークローム	60.3 × 92.2	寄贈
写真	グループSYS	秘められた国東(21点)	1964年	ゼラチン・シルバークローム	各36.0 × 24.0	寄贈
工芸	一	ビーズバッグ・コレクション(156点)	19C.後半-20C.前半	ビーズ、皮、プラスチック		寄贈
工芸	堀尾 卓司	かほ	1970年代前半	赤間石	31.8 × 18.0 × 8.0	寄託
工芸	堀尾 卓司	なみ(波湧)		赤間石	27.8 × 20.8 × 6.8	寄託
工芸	堀尾 信夫	双峰研	2020年	赤間石	27.0 × 17.4 × 4.3	寄託



報告

■ 特別展  
野村佐紀子 写真展 「海」

2022年2月11日(金・祝)～3月27日(日)

写真家野村佐紀子の初期から現在までの代表作を中心に、151点を紹介しました。ゲストキュレーター藤木洋介による展示構成は、下関市立美術館の空間に合わせて写真の魅力を引き出す、意欲的なものでした。

連携企画 「わあ、嬉しい! ぜひぜひ!」故郷下関で展覧会をとの申し出に、作家から快諾のお電話を受けたのは、およそ2年前のこと。企画から開催に至るまでコロナ禍に翻弄されながらも展覧会が実現したことは、関係各位の力添えの賜物です。広報活動や動画の作成など、作家の関係者やご友人方の力は大きく、感謝してもしきれません。作家の母校、山口県立下関南高等学校での講演会(2021年12月13日)、下関市立川中中学校での職業講話(2022年3月3日)は、若い後輩たちに写真家野村佐紀子を知ってもらう良い機会になりました。やはり母校の九州産業大学および美術館には、プリントと額の借用に始まり、展示資料の解

説、催しでの連携と、多方面からバックアップしていただきました。映像を学ぶ大学院生たちが野村佐紀子の写真に想を得た映像作品を制作した東亜大学とのコラボ企画では、その完成披露試写会(3月12日、オンライン併用)も行われました。野村の写真をラベルに使用した日本酒「Sakiko」が地元の下関酒造から販売され、好評です。

関連催事 展覧会初日のアーティストトーク(2月11日)では、野村佐紀子と藤木洋介に岡本館長がお話を聞きました。故郷での個展開催に至る経緯、展示構成をめぐる計画を5回作り直したという、作家とキュレーターの白熱したやり取りなど、リアルなエピソードが明かされました。田中慎弥×野村佐紀子対談イベント(3月5日)では、芥川賞作家の田中慎弥を迎え、共に下関市の出身でそれぞれ第一線で活躍する二人が、互いの創作について語り合いました。オンラインイベント「学芸員と楽しむ、野村佐紀子の写真の世界」(3月6日、講師：中込潤 九州産業大学美術館学芸室長)と、講演会「野村佐紀子の写真について」(3月13日、講師：河野通孝 山口県立美術館副館長兼学芸課長)は、いずれも作家と親交の深い講師による催し。野村の写真の魅力に迫

る、貴重な機会となりました。

全てにおいて手を抜かず、全力で理想を追う野村佐紀子という作家に伴走し続けた2年。「大変だったけど、楽しかったよね。ふいふい。」過去に野村の展覧会を手掛けた九州産業大学の関係者の弁は、そのまま我々の感想となりそうです。(W)



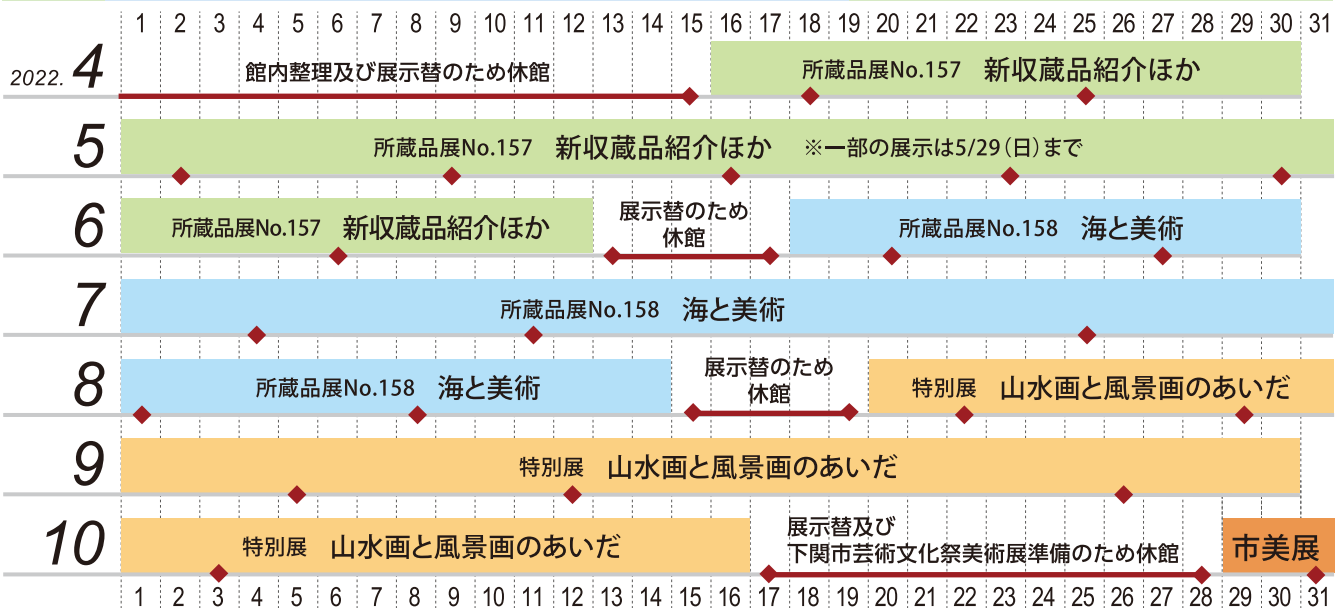
展示室で自作を解説する野村さん



田中慎弥×野村佐紀子 対談イベント

下関市立美術館展覧会スケジュール(2022年4月～10月)

会期・展覧会タイトルが変更になる場合があります。◆ 休館日



下関市立美術館NEWS